



4代目

中澤美喜雄 mikio nakazawa

なかざわ みきお／1961年生まれ。
高校卒業後しばらくは、運送業や建築業などのアルバイトをしながら、家業を手伝う。
1988年にフリーストール牛舎を建て、兼業から酪農専業へと移行。
現在は乳量、規模ともに町内屈指の酪農家となる。

結婚後、廣さんから経営を受け継いだ後も、夏の牧草づくりの時期以外は、依然として美喜雄さんのアルバイトは続いていたらしい。当時は親牛と育成牛を足しても34頭、所有地10ヘクタール。子どもが生まれて家族も増え、専業酪農家として生き残るには、規模を拡大するしかなかった。

生き残るための選択、それは規模を拡大し続けるという酪農経営だった。

「ところが、それがワナのはじまりだった」と美喜雄さんは苦笑する。
牛の頭数が限定されるつなぎ飼いで飼って、フリーストールだと頭数を増やさざるを得ず、その分設備にも投資することになるのが現実だった。投資した分の利益を上げるためには、さらなる規模の拡大が必要となり、結果として牛の数は今も増え続けているという。
もともと安定経営のための規模拡大ではあったが、なるべく負担を少なくと考えたにもかかわらず、多額の借金にもつながつてしまった。しかしもう後には引けない。牧草地を広げ牛の乳量を上げるなどの努力を続け、それがうまく回りだして目に見えて借金が減ってきた時、美喜雄さんはじめてこの仕事が面白いと思えるようになった。



なぎ飼い牛舎に比べて牛が自由に動ける牛舎のことだが、比較的新しいやり方で、当時はまだ成功例のデータなどが出ていない段階だった。
にもかかわらず、美喜雄さんがあえてフリーストール牛舎を選んだのは、ある講習会に参加したことがきっかけだ。牛舎は自分で建てられそうだし、つなぎ飼いより設備への初期投資が少なくすむ、つまり経済的な負担が少ないと考えたからだ。



3代目

中澤 廣 hiroshi nakazawa

なかざわ ひろし／1931年、最栄利別地区の農家に生まれる。祖父、父から受け継いだ土地を開墾し農業を営むかたわら、林業関係の仕事も請け負う。引退後は、町議や民生委員、身体障害者福祉分会会長などとして地域に貢献。



父廣三郎さんの代になり、初めて牛2頭（エアシャー種）を導入したのは昭和6、7年。廣さんが小学校に通う頃には8頭に増え、重さ約30kgの牛乳缶を、子どもの廣さんも毎日歩いて集乳所まで運んだという。
「鋸別川で半日も釣りをすれば、背負いきれないほどの魚が獲れたから、干して冬の食料にも保存したり」、学校から帰ったら薪づくりやそば挽きの仕事をこなすなど、当時は子どもも重要な働き手だった。

富山県からの移民は皆、自給自足で生計を立てていた。

昭和20～30年は家畜の数も増えて半農半畜の農家が多く、中澤家も農耕馬を5頭所有し、じゃがいもやビートなど換金作物をつくるようになっていた。
廣さんが3代目として農家を継いだ昭和30年、乳量の多いホルスタイン種を20頭導入し、本格的な酪農家を目指すことになるが、これは弟子屈町全体が酪農地帯に変わりつつある時期でもあった。
さらに昭和40年代になると、トラクターが導入され、北海道の酪農はいよいよ機械化農業の時代の幕開けとなるのである。
「昔は何でも手作業だから、今と違って身体をフルに使っていたね」と、自らの思い出とともに、弟子屈の開拓の歴史を中澤廣さんは語ってくれた。



酪農家・中澤家とその家族

地域に生きる二世帯